
神がここにいる

小田 浩正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神がここにいる

【Nコード】

N0305BA

【作者名】

小田 浩正

【あらすじ】

僕が昨日から困っていることと言えば、

明日が来ないことである。

…えっと、「はやくあしたがこないかなあゝ」などという、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないのでしょ…。

なんでこんなことを考えているかというと、僕に降りかかった不幸

のせいである。

僕、穂積隆明は例の事件からのことを考えてしまつて、あとの人生がどうなるかなんて全く気にしていなかった。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかった。

神様その他もろもろ出てくるハチャメチャなストーリーが始まります。

そして、『電車内は人の心』もよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

この作品、結構面倒です。

神様やその他もろもろ出てきます。

ハチャメチャなストーリーが始まります。

どうかよろしく願います。

あと、感想もよろしく願います。

プロローグ

僕が昨日から困っていることと言えば、

明日が来ないことである。

…えっと、「はやくあしたがこないかなあ…」などという、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないので…。

なんでこんなことを考えているかというと、僕に降りかかった不幸のせいである。

僕、穂積隆明は例の事件からのことを考えてしまつて、あとの人生がどうなるかなんて全く気にしていなかった。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかった。

「きやあああつあああつあああああああああああああああ！」

いきなりですみません。ちょっとヤバい事態が僕の目の前で起きていたので。

僕の叫びを聞いてしまった近所の方。ホント、すみません！

僕の部屋の壁は意外と薄いので、外からの騒音が良く入ってくるのです。なので逆に僕の叫び声も近所に響いてしまうのです…たぶん女の子の叫び声ならいいのですが、実際は、高音を喉から無理やり出そうとしているので、聞いてしまった方々は朝から不快にしまつたでしょう。ホント、すみません…。

第1話 第1章（前書き）

最初からぶっ飛ばします！

感想よろしくっ！！

第1話 第1章

さて、状況を説明します。

昨日、僕にとつて今まで生きてきた人生の中で、一番の試練に会ってしまいました。そのため僕は、今までにない疲れを感じ、そのままベッドで寝てしまいました。なので、寝巻を着てない。風呂にも入ってない。もうそろそろ、秋だというのに、昨日の夜は残暑なのか、暑かった。

すこし汗を書いているのか、体にシャツが張り付いて気持ち悪い。

「風呂に入ろうかな」

ちよつとずつ鈍い僕の頭がゆっくりですが動き始める。

さっきの叫び声の前あたりに戻りますが、あることに気づいたので。寝ていたはずのベッドから、落ちているのです。近くに最近買ったマンガも落ちている。元々、寝像は悪い方なので自分でベッドから落ちてしまったのではないかと、考えて目をこする。

窓のカーテンからさす日差しに、まぶしさを感じながら、ベッドの上を見たのです。このままの展開ならば…

窓からさす光を浴びて、神々しい姿で寝息(?)しているかわいらしい女の子が、すやすや寝ている

という具合だと思います。

しかし、僕のベッドに寝ているのは…。

「なにやってんだよ！そんなところで おばさんが寝てんなんて！」

そこにいたのは、だいぶ張りのなくなった頬、唇は不健康さが目立つ感じのすこし紫色に近い。完全なるおばさんがそこにいた。

「……んっ。どう……したの……？朝から……うるさいっ」

僕の悲鳴と怒声で起こしてしまったのか、少し伸びをしてこちらを見た。声がかすれている。絶対寝不足だろと思うぐらいまぶたが重そうである。

「目が覚めたか？そんなじゃあ、ゴーアウト！」

「……？横文字は弱いんだぞ？」

「わかったから……日本語で言い直すから……」

イラついてしまう。不愉快だ。朝からすぐに血圧が急上昇というのは、若くても危ない。

「……うん、早く言つてよ。眠いんだけど……」

「早く！出ていけ！」

「……？」

「『？』じゃあないっ！」

「イミガワカラナイヨ？」

なぜカタカナ？

「お前……ケンカ売ってんのか？」

さて、どうしてやろうか。1日3食抜きにしてやろうか

「……プスウ……」

こ、こいつ、布団に潜り込みやがった！

「無視したっ！寝やがったっ！」

「ムシ〜ムシ〜ムシ〜ムシ〜」

「ちよ、ちよっとおい！き、気色悪いから！やめろって……」

「……うん……」

理解を得られたようだ。それと言わなければならないことが……

「お前さあ、今顔がヤバいぞ……」

「え？……か、顔？か、鏡は？」

周りを見回し始めたので、近くにあった手鏡を渡す。

「ゲッ！」

やっと気づいたらしい。

ここで一応言っておくが、今まで僕が話していたのはおばさんであ

る。女の子ではないぞ！そこをご理解いただきたい。

「イヤッ！　なんで早く言わないの！」

色々ゴタゴタしていたから言う暇がなかった。早く言えば良かったかもしれない。なぜなら…

「うん！これで大丈夫だよ！私もピッチピチの〜」

「…幼女ね……」

一回後ろを見て少しぶつぶつ何かとなえたあと、ちゃんと昨日通りの顔に戻った。

「さて、これで君をイチコロにできるよ〜」

まさかあゝ。僕はこんな奴には欲情がわかないんだよ！この世の『ロリータ』なるものには興味がない！

「イチコロにするんだったら女の子じゃなくて、オンナになりなよ…」

「うっ…」

「でさあ〜」

彼女の顔のことが本題ではない。僕が問い詰めたいのが

「なんで僕のベッドで寝ているのかなあ？」

そう、忘れてはいけない！今も僕は冷たい床の上にいる。話している最中、彼女が上から僕を見下していたのだ。全くイライラして仕方なかった。

「だってさあ。まだこの家に来て1日目の寝る場所がリビングのソファで寝させるなんて、いったい君は何さまなんだ！？」

「お前の方が何さまだっつうの！　ここは僕の家で！　僕の部屋で！　僕のベッドなんだぞ！」

「それが？」

「プチッ……キレたぞ！」

「そこにいる化けたおばさんが僕の部屋にいる理由など、ないっ！」
一息ついて

「そしてお前とあと1週間過ごさなければならいなんてごめんだっ！」

「それは、きのうはなしたでしょ？」

ああわかつているとも。そうしなければならい理由は彼女にはあるが僕にはないのだよ！

「それに僕はおばさんとも、幼女とも同棲したくないんだよ！きれいな『お姉さん』かもしくは『美少女』かだ！」

「そ、そんなあゝ」

「わかったか！ 僕はお前が持ち込んだ厄介事を今すぐお前といっしよに、捨てたくて仕方ないんだよ！」

「ね、ねえゝそんなことまで言わなくてもいいんじゃないかなあ？」

「僕にはこれほど言いたいことがあつたんだよ。昨日言わせなかつたお前が悪い！」

さてどう落としてやるうか？

「で、でもね？お父様の言うとおりじゃなきゃいけないんだよ？それだけは……わかつてくれる？」

こいつのお父様とやらの話をされた。だから、これに対してはこいつの言うとおりでないと僕の命が危うい。

「そんじゃあゝさあ……何か僕に利益でもあるの？」

「うんうん！ それはこれからの君次第だよ！」

……ハッ？

「頑張れば、君の未来は切り開くことができる！」

「……」

「君とならできるんだよ！ 君じゃなきゃむりだよ！」

こいつ、頬を赤らめながら叫んでいるところがかわいいんだけど、実際にはおばさんだから、少し残念な気持ちにされてしまう。

「まあ期待しといていいんだよな？」

「そうだよ。期待しといたほうが絶対いいよ！」

しかし、これからなんだよな。あと一週間耐えられるかわからない。「さて、僕らがやらなければならいこととかは、昨日言われたこ

とだけなのか？」

「うんそうだよ。それで、私にもちゃんと能力があるから大丈夫。なんとか君を助けるぐらいは出来ると思うよ」

「その自信はどこから？」

「元々、保証できるものだから自信があるんだよ！」

「いや、だからそれがどこからなのかって言ってるの」

「？　だつて神様だから！」

そう、こいつは神様の修行者。

会ったときにそう言われた。堂々とね。

「……うん。わかったよ」

僕は彼女に笑顔を向けてあげる。内心、憐れんでいます。

「そうでしょ。私のことを信じていれば、君は死なない」

恐ろしいことを言う。だがこれは脅迫などではない。実際にあったから。

昨日は危なかった。危なかったというより、死にかけ、死んだ。だが、こいつの能力で助かったのかは知らない。

「あ、すっかり忘れてた」

変なこと思い出してしまった。昨日のことを回想していたら、今一番気にしてなくてはならないことを思い出した。

「今、何時？」

「エット…私二八人間デ言う時間トイウモノガ理解不能デシテ…」
絶対わかってるよ、こいつ。

「…早く」

「は、はい！」

2人で時計を探し始める。

いつもはベッドの近くに置いてあるのだが、昨日は時計をセットしなかったためどこにあるのかわからない。

「あっ！ あったよ」

「何時だっ！」

「午前八時前です」

「ノオオオオ！」

今日は学校なのだ。それも週のと真ん中。自分が起きた時間が把握していない僕がいけないのだが、いままでとは全く関係がなかったことに関わり始めてしまったため、何もかも狂い始めているのかもしれない。

「ど、どうしたの？」

「学校なんだよ！ 僕たち学生は勉強に励まなければならないんだよ！」

自分で言ってるのもなんだが、あまり授業には集中したことがない。

「ちよつと、や、ヤバ！」

「く？ ホント大丈夫？」

「制服！ 制服はどこだよ！」

おいおい。この時間にはもう学校に向かってなきゃ間に合わなくなる。昨日のようにはなりたくない！

「このことか？」

「おいっ！ なんでお前が踏んでんだよ！」

さて、どうするか？ 親が特殊だから弁当は毎日僕が作っている。なので、どこかしらで弁当を買わなくてはならない。すべて昨日と同じことをしてしまっている。

また、僕は大変な目に会ってしまうのかもしれない。

なんか、ゴタゴタ騒ぎで済みませんが、一応説明します。

僕のベッドの上にいるのは、幼女 に化けた僕より長く生きている神様の修行者らしい。そして、昨日から居候し始めた。僕はこんな日々を過ごさなければならぬ。

どうしてこうなったのかは、一回僕の主観の昨日というより、周りの人々を主観とした昨日から説明をしなくてはならなくなってしまう。

それでは、僕とおばさんの出会いをなるべく短くお話ししましょう。たぶん短くはならないけど。なるべく短くします！なるべく…。

では昨日の回想を始めます！

第1話 第2章（前書き）

『電車内は心の中』もよろしく願います。

第1話 第2章

ある晴れた日のことです。

その日もいつも通りに、教室の窓側の1番奥の席（いわゆる特等席）で、とある授業でよく寝ている、僕の目の前でいつも通りに熱血先生が鼓膜を破ぶような勢いで、

「起きてるか！」

「は～～い。起きてますよ！」

もう完全に慣れてしまったこの会話。

「そうか！その調子でがんばれ！」

…毎回思うのだが、アホなのかな？僕は、黒板なんて見てないで、机で日向ぼっこか窓の方を見て…「あ、トンビだ」など眺めるかの2択。この授業を全く受けてないことをクラス中みんなには、知られている。教科書は開かないし、ノートは真っ白って言うより、この授業だけはノートを持ってこない。なぜかって言うと、この先生の最初の授業で、僕は驚いてしまった。

黒板に書かれた文字が読めない…。

まあまず、日本語じゃない。

英語でもない。

アラビア語に近いのだろうか、ほとんど記号が集まって、文が構成されている。

それをクラスみんなが全く気にしないで、ノートを必死にまとめている。

それに、50分授業のはずなのに1人あたり、ノートをめくる音が普通の授業だと、1～2ページしか使わないはずが、3回以上聞こえるのである。つまり、6ページ。そんなにページを使って何を書いているのか気になってしまう…。

内心では、もう授業についていけないあと思った。というか、確定事項になってしまったが…

「いい加減にノートに黒板のをさあゝ写したらどうなの」

先生が僕の所から黒板まで戻って、また何かよくわからない文字列を書き生み出し始めた後に、隣の須原さんが話しかけてきた。

「前から言ってるじゃん。日本人なのに先生の文字が読めないんだよ。僕、日本人をやめてしまってるいいのかな？ それとも先生が日本人をやめた方がいいのかな？」

「私は、君がなんで読めないのかわかんないけどね」

「いや、なんで僕以外の方が先生の文字読めるのかわかんない」

「じゃあ、例えば黄色で書かれたあの文。読めるでしょ」

「○× □…」

「……。わざと読んでないよね」

「……」

「いかにも、アニメに出てきそうな言葉を使ったよね」

「これ以外に、表すことができないんだよ！」

「本当に読めないんだね。君のこと憐れんでいいかな？」

「そんなことで僕はめげない！」

「じゃあ、授業ちゃんと受ければいいじゃない」

もつともである。

「じゃあさ、なんて書かれてるかわかるの？」

「こう書かれてるんだよ」テストに重要だから覚えておけよ。では、書いてやろう。そう、おいしいプリン作り方だ！」

この授業、世界史だったはずなんだけどなあ…。一応、初めてプリンが広まり始めたか、触れておきたかったのかなあ。それにわざわざ喋っていることをさあ…そのまま書いているのかあああ！

「『材料（5個分）プリンの生地卵 3個（Mサイズ）…』」

キーン コーン カーン コーン

須原さんの先生が書いた文字の翻訳中に授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「おっと、もうこんな時間か」

「まだまだ説明する気でいたらしい。」

「では、授業を終わりにする。今日の授業の復習として、1回でも親のために、私のおいしいプリンのレシピを使って、作ってみるといい」

「……はいっ！」「」「」

「では、さらば！」

いつも通り、クラス委員長の合図で、「気をつけー・礼！」の代わりに、

「レディー・ゴー」

と叫び、ドアの近くに座る人が思い切りよくドアを開けて、先生が勢いよく走りぬけていく。凄まじい音が廊下を響いている。どどどおおおおおうううう

「さて、部活く部活く。夏の甲子園に向けて、レッツ・ゴー」

「野球部のマネージャーだっけ？」

話しながら彼女は、足踏みをして

「ばいばい」

「無視ね……」

走り去って行った。

それに、他の子も部活が楽しみなのか、ほとんどの人が、1分以内に教室からいなくなった。普通に体育系でない子たちまで走ってた。その中に、さっきの彼女も含まれる。最近文芸部もちゃんと体力作りからがんばるのかな？

さて僕も、学校にいる意味がなくなる。なぜなら、帰宅部なのだから。……あんまり自慢げに言うとか痛む。というか、帰宅部の目標が誰よりも早く自分の家にたどり着くかの競争なのに、幸先、スタートからもう出遅れた。もう、帰宅部としての威厳がない。まあ元々ないけどねえ……。

「どけどけどけ！」

と掃除係の人がタツクルしてきた。いつもながら、とにかく部活に早く行きたいそうで、人のことなんか全く考えてない。よくて3分待ってくれるかどうか、きわどいところ。カップ麺も待てないのか。こんな教室からとつと出た俺は、することがない。人生がこんなのでいいのか？と言われると、まあ別にいいかな、というぐらいにグダグダな生活をしている。

こんな日常で僕は十分良かったのです。枯れてませんよ？ ですが僕はこれからの日常がこんなにも変わるなど、この時もまだ知らなかったのです。

第1話 第3章（前書き）

元々原稿を書いてあったので、1日でこれほど掲載できました。

『電車内は心の中』もよろしく願います。

第1話 第3章

僕の特技と言ってはなんですが、そこらのリア充（僕より生活に充実しているということです）とは違い、朝が強いいため、規則正しい生活（身体的に）を充実させているのです。ここは胸張って自慢しますよ！それで、朝飯も食べ、制服に着替え、いざ行こうとするのですが、たいてい…

「ねえ、お母さんのために、朝ごはん作ってえ〜」

だらしないお母さんが登場。髪がボツサボサの状態で、眠たげな顔をしている。

そして

「なんで、またパジャマ着てないんだよ！ 風邪ひくだろ！」

「前から言ってるじゃない。ちよつとパジャマって苦手なのよ〜」
別に家族だから気にしなくてもいいと僕自身が許せるなら、いいんだけど…。子供の僕から見ても、お母さんのスタイルがまぶしすぎるのである。

お母さんの名前は、穂積愛里子。仕事が女優で、40を超えても全く世間からの評判が落ちず上位におり、僕の友達でも、お母さんのファンがいるほどだ。

しかし、それは表の顔だけで、家に帰ってきたら、完全に僕よりおこちゃまになつて、家事全般、僕に全てまかせきりにする。もうちよつと自立してくれたらいいのに。

「もう行かなくちゃいけないから。というか、フレンチトーストぐらいは作つといたから」

「ねえ、もうちよつとお母様のために、おいしい心温まる手作り料理とかないの〜？」

「というか、僕の腕に絡みついてくるな！胸が当たってる！」

「うふふ。赤ちゃんの時は、お母さんの胸を鷺づかみにしてたくせに」

「とにかくはなれろ！」

「お母さんのために作ってくれるなら、放してもいいわよ。だから、おねがいしま〜す」

涙を浮かべた目で僕を上目づかいで見てる。どう見ても、芸能界の清楚な美人が全くの台無しになってしまっている。

「もう、わかったよ。ちゃんと作りなおすから…。早く放せ…」

「うんうん。お母さん、明ちゃんがこんな子に育ってくれて、ありがたや、ありがたや」

本当に手を焼く親である。

ほんの10分で、ちゃんとした料理が出来上がる。作ったのは、少し焦げたスクランブルエッグ、ウインナーが2本、それも、弁当用の小さい赤ウインナー。あと先ほど作ったフレンチトーストを焼き直し。作っている間、

「まだ、できないの〜?」

とか

「早くしてよう〜!」

とか

「がんばってえ〜」

とか、とにかくうるさかった。

そして、僕の体にまわりついてきたり、首締めてきたりして、フライパンを手放すしかない状況に追い込まれ、スクランブルエッグを焦がしてしまった。初歩的ところで、失敗するなんて、ホント、自分が情けない…。

「じゃあ、明ちゃんの愛のこもった手料理、いただきます〜!」
ホントめんどくさい。そういえば、もうそろそろ学校に行かないと遅刻する時間になってきている。

「このスクランブルエッグの焦げ具合がちょうどいい」
なんか失敗したところが、高評価もらってるんですけど…。なにが

いいのだろうか？炊き込みご飯のおこげとかならわかるんだけど。

「満足したんならもう行くよ」

あ、そういえば…。

「ねえ？今日、確か映画の撮影だったよねえ？有名な俳優ばっか出るやつ。夜遅いよね？」

「何言ってるの？昨日話したばかりじゃない。明日よ。今日は丸１日暇なの。だから、なんか楽しんできちゃおうかな？」

ちよつと待て…。明日？昨日話した？何言ってるのか理解できない。だつて、

お母さんの予定聞いたのは、おとといのはず。

おととい、お母さんはドラマの撮影のために、夜遅く帰ってきて僕は母親思いのいい息子のため、温かい料理を作つてあげた。そして、昨日は丸１日休みだということで、ショッピングモールに出かけた話を聞いていた。

「そうだなあ…近くに新しくできたショッピングモールで明ちゃんのために、なにかいいもの買ってきてあげようかな？楽しみに待っててね。あと、時夜さんのために、いいネクタイでも」

時夜さんというのは、僕の父さんで、えつと…いまどこで何しているのか、お母さんしか知らない。なぜか教えてくれない。相当やばいことやってるのかな？

もしかして、軍の特殊部隊所属していて、僕たちの平和は彼らによつて守られているとか……ないか。

「もう行かないといけないんじゃないの？」

時計を見ると、いつの間にか１０分たつてとつくに、遅刻してしまう時間になっている。

「そうだな…あのさ、もうそろそろあいつも起こしとかないと、学校送れちゃうぞ」

僕の家族は４人家族だ。ご紹介した両親、僕その他、中学生の妹が

いる。いつも僕に起こしてもらわないと起きないが、今日ぐらいは自分を大事にしたい。

「うん、わかったあゝ。わたしじゃ起きないかもねえゝ」

「とにかくお願いね！　じゃあ、行ってきます」

「いつてらっしやいゝ」

でも、さっきの話、僕の誤解だったのかな。まあそんなことはいいや。今は、僕が遅刻して担任からのしつこい長話を聞くのがいやなので、急いで家を出た。

……のはいいけど、ヤバイ…弁当作んの忘れてた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305ba/>

神がここにいる

2011年12月31日20時54分発行